

私が専門にしている日本思想史についていえば、従来その研究は、仏教・儒教・神道・キリスト教といった個別のジャンルごとの、高度に理論化された思想体系や頂点的思想家を取り上げたものが圧倒的だった。そのため、ある時代の思想世界の全体像を描く際にも、そうした体系的思想の合算としてそれを行おうとする試みが、学界の主流をなしていた。

私はそうした研究のあり方に、強い疑問を感じてきた。頂点的思想はそれぞれの時代において孤立した思想にほかならず、それを積み上げていくことによって、個々の思想に還元されない時代思潮をトータルに再現しうるかどうかについては問題が残る。

私たちがまずなすべきことは、頂点思想や体系的思想を同時代の思想的な文脈に位置づけていくための座標軸となるべき、当時の人々によって共有されていた世界観であり価値観の解明ではなからうか。だが前近代社会においては、特に史料的な制約によって、民衆までをも含む時代思潮を

新たな日本思想史像を求めて

佐藤弘夫

明らかにすることは極めて困難だった。

私はこうした問題意識に基づき、これまで思想史研究の史料としてほとんど注目されることなかった、古文書や金石文などを積極的に活用して、立体的な思想史像を構築することを近年の自身の課題としている。四月に刊行された『起請文の精神史』（講談社選書メチエ）、『神国日本』（ちくま新書）は、いずれもそうした試みの中から生まれたものであり、頂点思想を羅列しただけの常識的な「日本思想」像を、根底から解体していくことを強く意識したものである。

現在は東日本に数多く見られる中世の板碑を素材として、当時の人々が共有していた世界観を究明することを中心テーマとしている。こうした研究の蓄積を踏まえ、ここ数年のうちに、何冊かの本において、太古から近代に到る日本人の生死観の変貌に関するおおまかな見取り図を書きたいと考えている。